

## パシルネ・ニュースレターへようこそ！

戦後の急速な近代化により伝統文化が衰退した太平洋の島嶼国では、伝統的な知識が適切に記録されことなく失われつつあり、現地住民がアクセスできる彼らの文化や歴史に関する情報も非常に限られています。私達は、彼らが自分達の文化や歴史について学ぶことが、自民族への誇りやアイデンティティの醸成、さらには伝統にもとづいた現在そして未来の文化の創造へつなぐと考えます。

こうした社会の実現に向けて、NPO法人パシフィカ・ルネサンス（通称・パシルネ）は、オセアニアの現地住民による伝統文化の復興・再生（ルネサンス）に貢献するために、文化や歴史の記録・調査・教育での活用に取り組むことを目的として、2014年9月にオセアニアの青年海外協力隊OBや研究者が中心となり設立

されました。

このニュースレターでは、パシルネが設立以降2015年に行った主な活動について報告します。この期間、私達はミクロネシア連邦での活動とオセアニア島嶼国の人々を対象としたインターネットでの情報提供を中心に行いました。

パシルネのプロボノであるミクロネシア人のデイヴィットソン・サインさんによってデザインされた、このニュースレターのヘッダーには、オセアニアの島々で遠距離のコミュニケーションの手段であるホラ貝が使われており、パシルネから皆さまへ情報を発信するという意味が込められています。

### 記録・調査・教育

## ミクロネシアでの口承伝承の記録と動画の配信

元来文字を持たないミクロネシア人は、重要な情報を口頭で代々継承してきました。中年以上の人々にとっては、就寝前に父母・祖父母から昔話を聞くのが子供の頃の習慣でしたが、近年若年層の伝統文化への興味の薄れにとともに、口承伝承は消滅の危機に瀕しています。

このプロジェクトは、代表理事・長岡拓也が以前にミクロネシア連邦ポーンペイ州のモキッロ環礁（2002年～2004年）とピングラップ環礁（2014年2月～3月）で行った口承伝承の記録の継続です。前者については現在本の編集を行っており、後者については今回継続して行いました。以前は将来的な出版を念頭においてサウンドレコーダーを使用して語りを録音していましたが、2014年よりインターネットで配信するためにビデオカメラを使って映像として記録しました。簡単で拡散能力の大きい、この新しい方法は、今後の利用に大きな可能性を持ちます。2015年は、長岡が2月から4月までと10月から翌年3月まで主にポーンペイ本島在住のカピングマランギ環礁・ヌクオロ環礁・シャプアーフィック環礁・ピングラップ環礁・モキッロ環礁・モートロック諸島の老人を対象に

記録を行いました。また4月と11月には貨客船でカピングマランギ・ヌクオロ・シャプアーフィックを訪れ、多くの老人から記録することができました。

これらの動画の一部は、パシルネのYouTubeチャンネル（2ページ参照）で配信しています。この活動はミクロネシアの新聞『カセレーリエ・プレス』に取り上げられました。



ピングラップ人への聞き取り

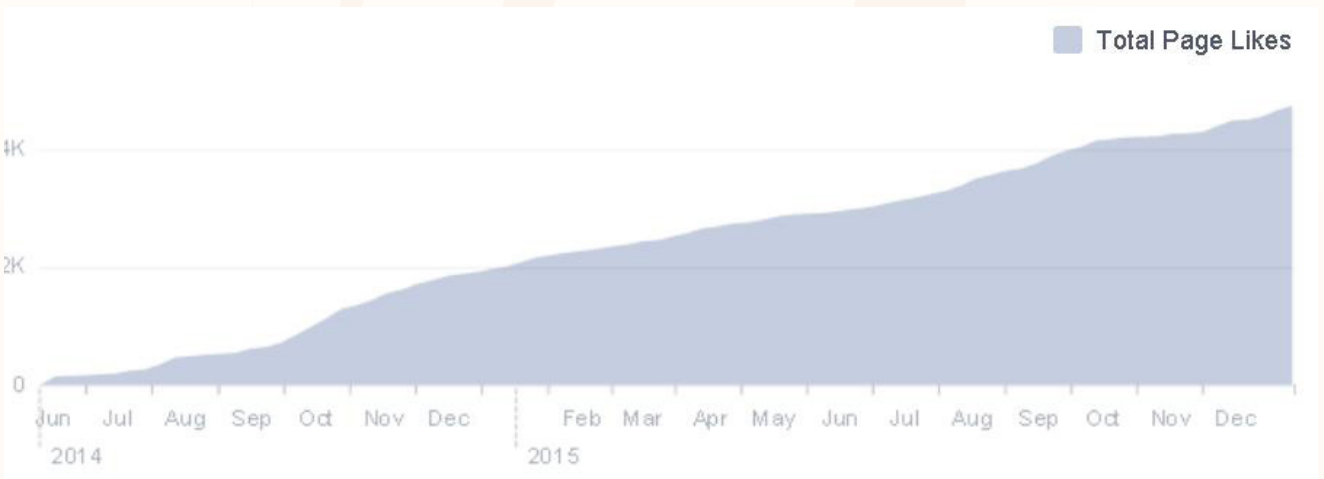
# インターネットでの情報発信

2014年6月に開設したパシルネのフェイスブック・ページ（以下「FB ページ」、<http://www.facebook.com/PashifikaRenaissance>）では、毎週1回のペースでオセアニアの伝統文化・歴史やパシルネの活動に関する情報を英語と日本語で発信しています。2015年末で4700人に達するファン数は、オセアニア地域の文化的分野で活動しているNGOの中では有数の数となっています。ファンの内訳としては、ミクロネシア連邦全人口の3分の1が出稼ぎに行っている米国・米領グアム57%、ミクロネシア連邦11%、日本5%、その他オセアニア諸国20%となっています。

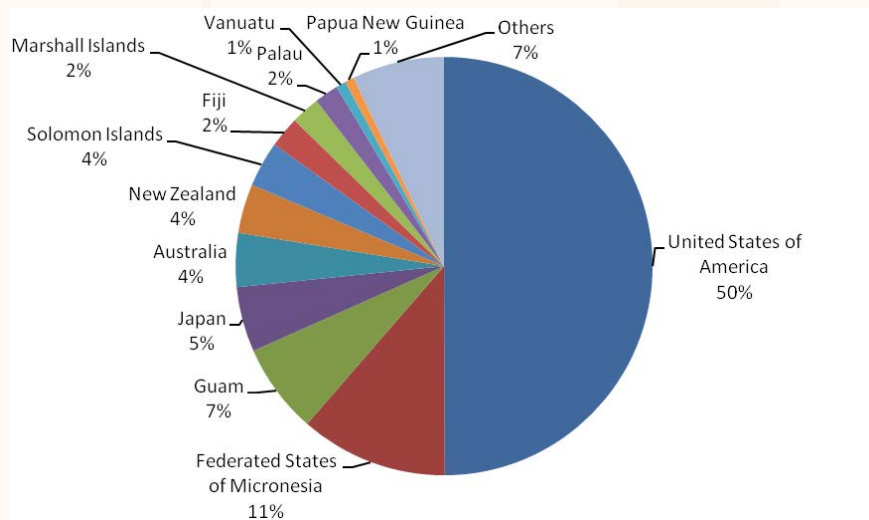
またこのFB ページへの投稿より多様な内容の投稿をしたり、オセアニアの人々自身による情報のシェアや意見交換への参加を促進したりするため、2015年3

月にフェイスブック・グループをつくりました（<http://www.facebook.com/groups/1424775454486112/>）。2015年末で1900人がメンバーとして登録しており、オセアニアの人々が活発に利用しています。

さらにパシルネで記録した動画を配信するために、2015年4月にパシルネのYouTubeチャンネル（<http://www.youtube.com/channel/UCnmyAfrAD0u4MpUF9jLgJag>）を開設しました。前述の口頭伝承の動画の他に、文化的な行事やインタビューの動画を公開しています。動画の内容がパシルネが活動を行っているミクロネシア連邦が中心となっているため、ミクロネシア人が多く出稼ぎに行っている米国（66%）・米領グアム（7.5%）とミクロネシア連邦（9.4%）で全アクセスの約8割を占めています。



パシルネのFB ページのファン数の推移



パシルネのFB ページのファンの国・地域別内訳

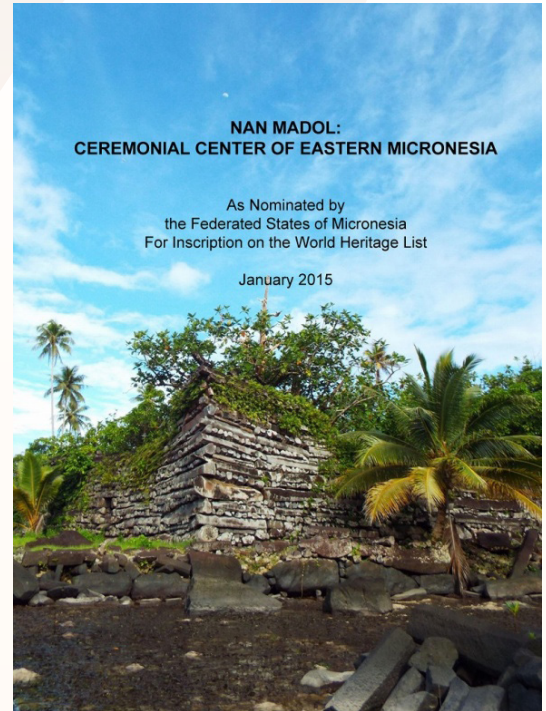
## 技術協力

# ポーンペイ島のナンマドール遺跡、世界遺産登録へ申請！

ポーンペイ島のナンマドール遺跡は、90以上の人工島がサンゴ礁の浅瀬につくられた、太平洋の島々の中でも規模的に最も大きい巨石遺跡です。過去の考古学調査から、紀元500～1500年頃にかけて築かれた、宗教・政治のセンターであったことがわかっています。この遺跡を世界遺産に登録するというのは、ミクロネシア連邦政府の長年の夢でしたが、地域住民と政府との間の遺跡の土地所有権をめぐる確執や技術的な問題から申請を阻まれていました。しかしユネスコ太平洋州事務所の要請にもとづき、2011年より日本・米国・オーストラリアが技術協力を開始したことにより、申請に向けて動き始めました。

代表理事・長岡拓也は2012年より国際協力チームのメンバーとしてミクロネシア連邦歴史保護局によるナンマドールの世界遺産登録事業に参加しました。2014年より同局からの受託事業として、ポーンペイ州歴史保護局や他のメンバーと調整と推薦書の作成をポーンペイで行い、2015年1月にユネスコ世界遺産センターに推薦書を正式に提出しました。2月にはユネスコ世界遺産センターによる完全性チェックの結果、推薦書が

すべての技術的な必要条件を満たしているという通知書を受け取りました。同センターによる登録の最終決定は、2016年7月に行われます。



ナンマドール遺跡世界遺産推薦書の表紙

## ヤップ島での石貨遺跡の調査・記録のトレーニング

ミクロネシアのヤップ島では、直径20センチから3メートル以上になる巨大な石のお金、石貨が現在でも儀礼的な交換の場で使われています。この石貨は20世紀初頭まで500キロメートル離れたパラオで切り出されて、先史時代はカヌーで、19世紀後半以降は欧米人の船で運ばれていました。石貨は特に村の集会所や男子集会所に隣接して設けられた踊りの場に数多くならべられました。

2010年、ヤップ州歴史保護局は、パラオ歴史保護局とともにヤップ島の石貨遺跡とパラオ島の石貨採掘遺跡を世界遺産へ

登録するため推薦書を提出しましたが、翌年の世界遺産委員会で不登録となりました。その後、両歴史保護局は再申請に向けて準備を開始し、この一環として2015年5月に代表理事・長岡拓也がヤップ州歴史保護局スタッフに対して遺跡の調査及び記録データベース作成・管理に関するトレーニングを受託事業として実施しました。



タミル地区での大きな石貨の計測



ガギル地区でのトレーニング

## その他の活動

### パシルネのロゴ決定！

パシルネの正式なロゴが決定しました！私達の暫定的なロゴから、オセアニアの人々によってデザインされたパシフィック・テイストなロゴにするため、ロゴデザインの募集を2015年2月に行いました。このコンテストは、オセアニアの人々のクリエイティビティを刺激するという企画でもありました。応募要項をフェイスブックを通して拡散したところ、5人から24点の応募がありました。パシルネのメンバーによる選考に残った4点を8月にフェイスブック上で最終投票を行ったところ、合計168票の投票があり、ミクロネシア連邦ポーンパイ州在住のモートロック人で、連邦政府教育省勤務のデイヴィットソン・サインさんのロゴに決定しました。（私達は、このパシルネ・ニュースレターをデザインして下さった彼に感謝したいと思います。）最優秀作品への賞金に加えて、応募者へは参加賞が送られました。

ロゴにこめられた意味は、『グンカンドリによって導かれたカヌーに乗って、私達は過去から現在へと時間を旅をして未来へと向かいます。オレンジ色の太陽（外側の弧）・月（内側の弧）は時の流れを、3つの星はオセアニアのミクロネシア・メラネシア・ポリネシアを表しています。太平洋の島々で最も重要な木である

椰子の木は、子供が生まれると植えられていたことがあるように、誕生、ここでは伝統文化に新しい息吹を与えること（ルネサンス）を象徴しています。』



デイヴィットソン・サインさんの最優秀作品



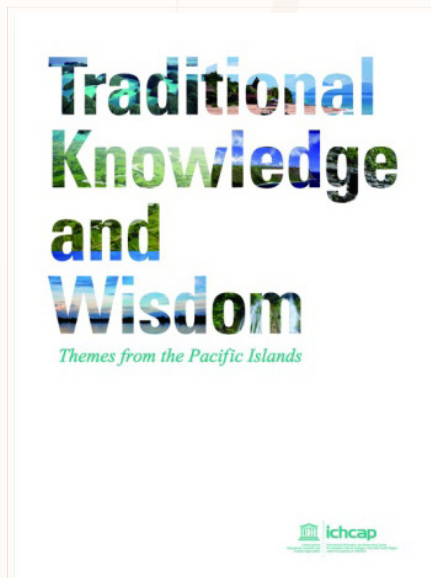
デイヴィットソン・サインさん



応募作品

## 出版

1994年、当時青年海外協力隊員であった代表理事・長岡拓也は、ミクロネシアのモキッロ（旧名モキール）環礁で廃れつつあった伝統的な帆走カヌーの製作技術を記録しました。ミクロネシア連邦歴史保護局の要請を受け、長岡がそのカヌー製作の伝統に関する英文論文を寄稿した、ユネスコの関連機関であるICHCAPによるオセアニアの伝統文化に関する出版物『伝統的な知識と知恵：太平洋の島々からのテーマ』が、2014年12月に出版されました（[http://www.ichcap.org/eng/contents/book\\_list.php?mode=view&code=B0000586](http://www.ichcap.org/eng/contents/book_list.php?mode=view&code=B0000586) からダウンロードできます）。2015年3月に、長岡が参加したその本の出版記念式典は、ミクロネシアの新聞『カセレーリエ・プレス』に取り上げられました。



『伝統的な知識と知恵』の表紙

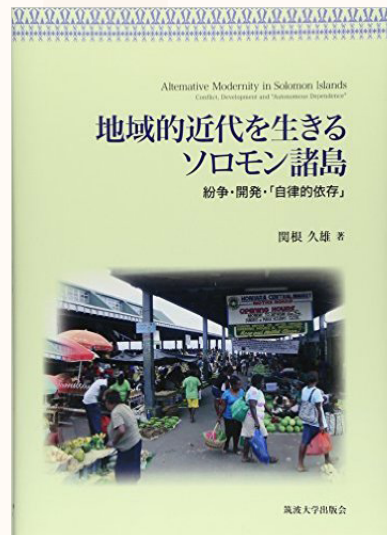


出版記念式典 © Bill Jaynes

4月には、長岡のこの論文をもとにした英文の記事が、ICHCAPが発行するアジア・太平洋地域の

無形文化財に関するニューズレター『ICH Courier』に掲載されました（<http://www.ichcap.org/ebook/ecatalog.php?Dir=55&catimage> でご覧になれます）。9月には、長岡のパシルネについての紹介の記事「オセアニアの伝統文化・歴史遺産の保存・継承をめざして」が、『ナント経済月報』（一般財団法人南都経済研究所発行）の「NPOだより」コーナーに掲載されました。10月には、長岡の「太平洋の島々の伝統文化と無形文化財を保存し、新しい息吹を与える」という英文の記事が、前述したICHCAPのニューズレターの「保護のパイオニア」コーナーに掲載されました（[http://www.ichcap.org/courier/Courier\\_E25.pdf](http://www.ichcap.org/courier/Courier_E25.pdf) からダウンロードできます）。

開発人類学を専門とする関根久雄理事（筑波大学教授）も『地域的近代を生きるソロモン諸島—紛争・開発・「自律的依存」』（筑波大学出版会、2015年）を出版しました（その他の業績については、<http://www.u.tsukuba.ac.jp/~sekine.hisao.gm/frame-gyoseki.html> を参照）。



またパシルネのメンバーである井上郁子が執筆した、ミクロネシア連邦から近隣の米国領グアムへの人口移動現象にクローズアップした論文「ミクロネシア連邦からグアムへの移民増大がもたらしている社会問題の一考察」が『日本福祉大学経済論集』（第51号 2015年10月）に掲載されました（[https://nfu.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_uri&item\\_id=2466&file\\_id=18&file\\_no=1](https://nfu.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=2466&file_id=18&file_no=1) からダウンロードできます）。

# 法政大探検部によるポーンペイ島の謎の遺跡調査への支援

パシルネ代表理事の長岡は、関西外大片岡修教授とともに、2014年より法政大学探検部によるポーンペイ島の山間部にある遺跡調査を支援しています。この遺跡は、ニュージーランド人考古学者シャネット・デイビットソン博士が1967年に踏査して簡単な記述を残して以来、忘れ去られていた大型集落遺跡で、同部からミクロネシアの島の山間部で未発見の遺跡を調査したいとの連絡を受けた長岡が、この遺跡について紹介しました。

2014年と2015年に同部は、ミクロネシア連邦・ポーンペイ州歴史保護局や地元の首長の許可を得て、デイビットソン博士の記述から、可能性が高いと考えられたマトレニーム地区セニペーン地域のトレン・レペン山（標高470メートル）で調査を行い、その遺跡であることを確認しました。1967年には、80以上の遺構が確認されましたが、法政大の調査では植生の繁茂が著しく、2014年に9遺構と2015年に5遺構を山頂部と中腹部に記録するにとどまりました。

興味深いことに、口頭伝承によると、この遺跡はポーンペイの山間部に居住していたショウンカワット氏族の有力首長としてセニペーン地域を治めたレペン・マルが、拠点とした集落であることがわかりました。これが理由で、この山はトレン・レペン、ポーンペイ語で「レペンの山」と呼ばれています。このレペン・マルという



ポーンペイ島とトレン・レペンの位置  
首長位は、現在でもセニペーン地域のショウンカワット氏族によって保持されています。

同部は、2016年2月下旬より2週間の現地調査を計画しており、今後この遺跡の全容解明に向けて調査を継続する予定です。この調査によってポーンペイの先史時代を考える上で空白であった山間部での居住についての理解が進むことが期待されます。



法政大学探検部メンバーとホストファミリー © 法政大学探検部

# 会員・フラボノ・パートナー

## 会員・プラボノ

パシルネは、長期的に安定した活動を行うために、財政的な自立を目指して収益事業の確立を模索しておりますが、公的な助成や収益事業の展開が難しい分野・地域であり、会員の年会費や任意の寄付は必要な財源の一つです。パシルネの趣旨にご賛同いただける

皆さまには、是非とも会員（正会員・賛助会員・法人会員）になってご支援いただきますようお願い申し上げます。詳細については、[pasifika.renaissance@gmail.com](mailto:pasifika.renaissance@gmail.com)へメール下さい。

会員種別	
正会員	当法人の目的に賛同し、入会した個人及び団体。総会に出席（できない場合は委任状の提出）の義務があり、法人の運営・活動に参加する。
賛助会員	当法人の事業を賛助するために入会した個人。総会には出席できず、法人の運営・活動には参加しないが、活動を資金的に援助する。
法人会員	当法人の事業を賛助するために入会した団体
年会費（事業年度 4月1日～3月31日の1年分）	
正会員	ー□ 5000 円
賛助会員	ー□ 5000 円
法人会員	ー□ 20000 円
会員特典	
正会員	ニュースレターの送付。イベントへの優先的な参加。
賛助会員	ニュースレターの送付。イベントへの優先的な参加。
法人会員	ニュースレターの送付。イベントへの優先的な参加。ニュースレター・ホームページでの貴法人名の紹介と貴法人ホームページへのリンク。

会員・プロボノの皆さまには、この場を借りまして、感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

### 正会員（以下、あいうえお順・敬称略・氏名を公表することに同意いただいた方のみ）

井上郁子、磯崎淑子、井上雄二、小野英治、川嶋正和、小西潤子、小林泉、斎藤弘之、清水華恵、白川千尋、須藤健一、関根久雄、竹川大介、長岡拓也、ベン・シュルツ、宮澤京子、門田修、ユミ・シュルツ

### 賛助会員

東正人、巖淵光洋、大野志穂、大野康雄、川部浩子、小金丸梅夫、小西哲也、白川博章、白川由里、武田貴子、豊田悟、西村岳洋、古澤拓郎、益田兼房



## 法人会員

株式会社森覚貴誠堂 (<http://www.morikaku.org/>, [www.facebook.com/morikakukanseidou](http://www.facebook.com/morikakukanseidou))

ジェイピーエムズ株式会社 (<http://www.jpms1125.com/>, [www.facebook.com/jpms1125/](http://www.facebook.com/jpms1125/))



The First Ferry (<http://www.thefirstferry.com/>, [www.facebook.com/thefirstferrydubai](http://www.facebook.com/thefirstferrydubai))



## プロボノ

室谷裕貴（会計）、デイヴィット・サイン（デザイン）、ガリー・スコット、デイヴィット・ヴェガ、  
ジョッシュ・レヴィ（英文校正）

## 助成事業によるパートナー



ミクロネシア連邦  
歴史保護局



ポーンペイ州  
歴史保護局



ヤップ州歴史保護局



ICHCAP

## 【発行・お問い合わせ】

NPO 法人パシフィカ・ルネサンス

〒634-0843 奈良県橿原市北妙法寺町 2-10

Email: [pasifika.renaissance@gmail.com](mailto:pasifika.renaissance@gmail.com)

Facebook: <http://www.facebook.com/PashifikaRenaissance>

YouTube: <http://www.youtube.com/channel/UCnmyAfrAD0u4MpUF9jLgJag>



パシルネは、オセアニア島嶼国の伝統文化に新しい生命を与え、現地コミュニティに活力を与えるため、文化・歴史遺産を保存し、振興することに取り組むNPO法人です。パシフィカ・ルネサンスという名前は、「太平洋の島々 / 島の人々の伝統文化の再生・活性化」という意味です。

